

本学の体育実技における動機づけに関する一考察

中野, 武彦
九州大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科

<https://doi.org/10.15017/196>

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 16, pp.83-88, 1989-03-03. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

本学の体育実技における動機づけに関する一考察

中野武彦*

On Motivation of Physical Education Class in Our School

Takehiko Nakano

What motivates students to attend a physical education class? For it, we have called the roll, and actively approached them to make them learn earnestly. The data show something has emerged between them and us through classes. It is the aim of this paper.

1 はじめに

本短期大学部に於ける体育は講義30時間、実技45時間を1年次に開講している。講義15時間は1学期の後半に4クラス合併で開講し、残りの15時間は2学期に実技のなかに含まれている。従って、60時間は1クラス毎の開講となる。

体育は「身体(1)の教育だけでなく、身体活動とおおしての教育」として理解され、すでに小学校から高等学校まで心身の発達に応じて学習されているが、本短期大学部の体育講義及び実技の教育目標は、それまで学習したことを基礎にして、体育の場に於いて、教官の指導を受けながら、学生がより自主的に運動を実践し、年齢に応じた運動を、生涯スポーツとして楽しく実践するための理論と運動技術(2)を習得することと、「全人的な教育」によって、健康的な生活を営む基礎能力を身につけることにある。

「教育」は、ラテン語の“educere”をその語源とし、「人の才能を引き出す」という意味

がある。学生の能力または可能性を伸ばそうとすれば、まず授業に出席させることが基本になる。

本研究に於いて、昭和56年度から昭和62年度までの設定種目と欠席延べ人数を調査、分析し、教官の指導による「動機づけ」が学生の体育への出席意欲に与える効果について検討したので報告する。

2 授業の設定種目について

体育実技に於いて、種目を設定する場合には教官の指導により、施設、用具、受講人数を考慮して決定される。本短期大学部では、グラウンド、体育館、テニスコートが使用でき、テニスコートは固有の施設としてその管理、運営は体育教官と学務係で行い、よりよい環境づくりがなされている。

各年度の設定種目は表1に示す。なお、各年度とも、体力診断テストを年度の始めと終わりに実施し、雨天の時は体育館でできる種目を設定した。

* 九州大学医療技術短期大学部一般教育

本学の体育実技における動機づけに関する一考察

表1 設定種目別の選択人数と欠席延べ人数

	1学期-前半		1学期-後半		2学期-前半		2学期-後半	
56年度	テニス 31(1) * (11)	卓球 32(3) * (13)	バレー 29(2) * (7)	ソフト 30(14) * (16)	バレー 88(22) * (36)	バスケット 19(15) * (10)	柔道 5(4) * (5)	サッカー 10(4) * (7)
57年度	テニスとソフト 148(23)		テニスとソフト 446 * (90)		バドミントン 67(27) * (24)	卓球 32(8) * (17)	剣道 3(1) * (3)	
58年度	ソフト 159(24)		テニス 12 * (3)		テニス 280(65)	バレー 154(34)	バスケット 10(2)	テニス 117 * (55)
59年度	テニスとソフト 151(24)				バレー 72(20)	バドミントン 156(30)	バレー 171 * (35)	バスケット 73 * (34)
60年度	テニスとバレー 63(14) * (19)	卓球 15(5) * (6)	ソフト 15(0) * (6)	トレイ 4(0) * (0)	バドミントン 39(13)	バレー 72(20)	バドミントン 210 * (68)	卓球 126 * (23)
61年度	テニス 461(40)		テニスとバレー 125 * (6)		バドミントン 102 * (7)	卓球 39 * (0)	バスケット 27 * (1)	トレイ 18 * (3)
62年度					ソフト 35(19)	剣道 5(3)	柔道 3(0)	サッカー 20 * (9)
					軟庭 5(0)	ゴルフ 2(0)	フット 7(0)	
					長距離 3(1)			

注釈 1) 数字は選択人数、() は欠席延べ人数、* () は後半の欠席延べ人数

2) 56年度の1学期は2クラス合併、他は1クラスで実施

3) 57年度と59年度の1学期はクラスを2グループに分け、テニスとソフトを隔週で実施

4) 58年度の1学期は前半に全員ソフト、後半はテニスとソフトを隔週で実施

5) 60年度の1学期はテニスと選択種目を隔週で実施

6) 61年度と62年度の1学期は前半に全員テニス、後半はテニスと選択種目を隔週で実施

7) 56年度の1学期と56年度、57年度の2学期は前半、後半とも同じ種目

8) 58年度-62年度の2学期は前半、後半で種目選択。同じ種目の選択も可

ソフト：ソフトボール

バレー：バレーボール

バドミントン：バドミントン

トレイ：トレイニング

バスケット：バスケットボール

フット：フットベースボール

3 授業を欠席した学生への指導

体育実技は心身の健康をその基盤として、身体活動をとおしての学習が行われるので、授業に出席できることがまず評価される。

本学では、授業参加への動機づけとして、学生の健康状態を把握することを含め、出席をとるとともに、意欲的、自主的な身体活動の意義について講述した。また、欠席した場合は自分で原因や対策を考え、明日の健康管理に役立てるように欠席レポートを提出させ、具体的な動

機づけとした。61年度と62年度はレポートを提出させ、指導するとともに、年度始めに欠席した場合は次の条件で東公園をランニングすることを指示した。

- *) 指定された放課後に教官と一緒に走るが、スピードは個人の任意とし、楽しく走る。
- *) 距離は1周約700メートルのコースを5周走る。2回目からは一周ずつ増える。
- *) 走る前と走った直後、3分後に心拍数を30秒間測定する。

*) 時間を記録し、走るスピードと心拍数の関係を考察する。

4 結果と考察

欠席延べ人数を考察するとき、欠席の実数をそのまま検討し、有意差検定は5%水準とした。

年度別、クラス別の学生数と欠席延べ人数は表2、表3と図1に示す。

表2 年度別、クラス別の学生数

	看1	看2	衛生	診放	計
56年度	40	38	33	34	145
57年度	40	39	34	35	148
58年度	40	40	40	39	159
59年度	39	36	38	38	151
60年度	39	39	36	36	150
61年度	40	38	39	39	156
62年度	40	38	39	38	155
計	278	268	259	259	1064

表3 年度別、クラス別の欠席延べ人数

	看1	看2	衛生	診放	計
56年度	56	74	35	73	238
57年度	29	49	29	32	139
58年度	35	58	34	68	195
59年度	40	37	16	59	152
60年度	64	67	24	36	191
61年度	14	10	8	25	57
62年度	12	15	7	19	53
計	250	310	153	312	1025

欠席延べ人数を年度別で比較すると、61、62年度が最も少なく、56年度が最も多い。クラス毎でもその傾向は変わらない。

年度別、学期の前半、後半別の欠席延べ人数は表4と図2に示す。年度別で比較すると、全体的には学期が進むにしたがって欠席延べ人数が増えて、有意差も認められる。欠席理由には風邪や腹痛が多いが、バイト疲れ、朝寝坊もみられることから、緊張感からの解放がその要因と考えられる。

表4 年度別、学期別の欠席延べ人数

	1学期		2学期		計
	前半	後半	前半	後半	
56年度	25	54	70	89	238
57年度	23	23	37	56	139
58年度	24	39	63	69	195
59年度	24	31	33	64	152
60年度	23	40	57	71	191
61年度	11	6	17	23	57
62年度	6	11	17	19	53
計	136	204	294	391	1025

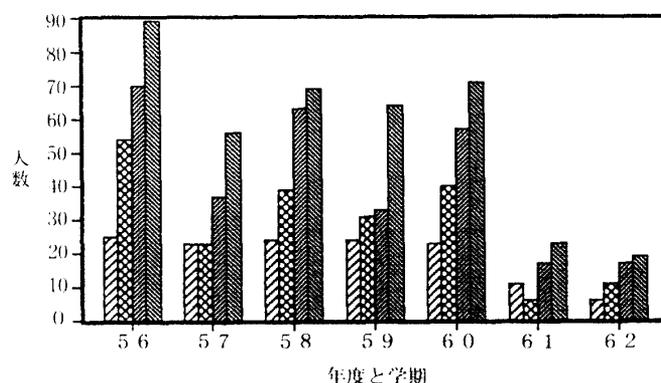


図2 年度別、学期別の欠席延べ人数

1学期の前半に関しては設定種目の違いは欠席の比率（種目選択人数に対する欠席延べ人数の比率）に影響していない。

1学期の後半に関しては、56年度の欠席の比率は他の年度と比較してたかく、2クラス合併授業が影響している。60年度と61、62年度は同

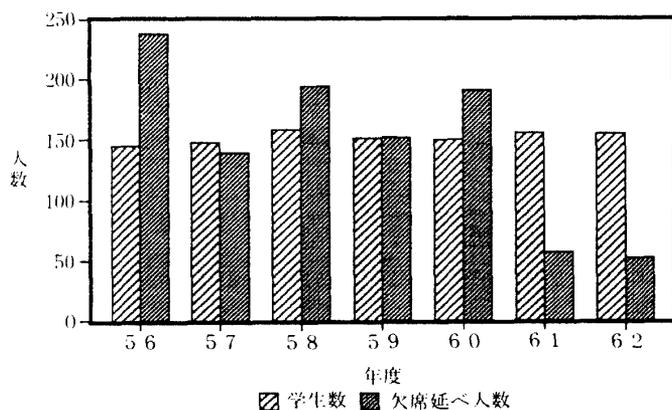


図1 年度別の学生数と欠席延べ人数

本学の体育実技における動機づけに関する一考察

じ実施要領だが、欠席の比率に有意差がある。60年度は3回以上欠席した学生については、春休みに休んだ回数と同じ日数(注—1日の距離は東公園コース5周)だけ走って、健康維持にはプラスになったが、年度始めにそのことを指示していなかった。

2学期の前半に関しては、表5と図3に示すように58年度以降の選択人数でテニスが圧倒的に多く、1学期の指導の効果とか、屋外スポーツに適した気候の特性を生かしている。また、欠席の比率では56、57年度と有意差はなく設定

表5 58年度から62年度までの2学期の前半、後半における種目選択人数と欠席延べ人数

種目		テニス	バレー	バスケ	バドミ	卓球	ソフト	トレー	その他	合計
選択	前半	280	154	10	156	72	35	39	25	771
	後半	117	171	73	210	126	0	51	23	771
欠席	前半	65	34	2	30	20	19	13	4	187
	後半	55	35	34	68	23	0	20	11	246

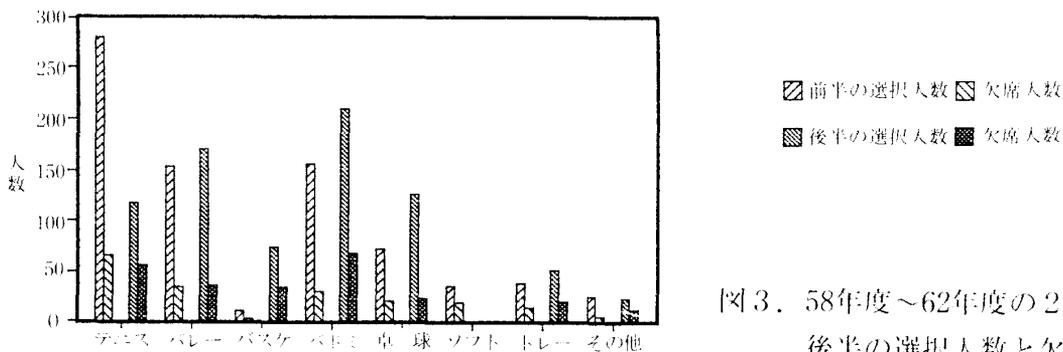


図3. 58年度～62年度の2学期における前半、後半の選択人数と欠席延べ人数

表6 年度別、欠席回数別の人数

年度	56	57	58	59	60	61	62	計
欠席回数								
1	34	39	38	34	39	26	27	237
2	26	22	18	14	17	9	6	112
3	14	12	11	11	8	0	2	58
4	15	2	10	5	11	2	2	47
5	6	1	4	2	4	1	0	18
6	1	0	2	2	1	0	0	6
7	2	1	0	1	1	0	0	5
8	0	0	1	1	1	0	0	3
9	0	0	1	0	1	0	0	2
計	98	77	85	70	83	38	37	488
欠席なし	47	71	74	81	67	118	118	576

種目の違いの影響はない。

2学期の後半に関しては、56、57年度と58、59、60年度では欠席の比率に有意差はない。58年度以降は新たに種目を設定したので、テニスの選択人数が減少し、バドミントンや卓球が増加した。これは気候条件を考慮した望ましい設定種目ではあるが、欠席の比率を下げる要因とはなっていない。また、各年度ともこの期間が欠席が多くなっており、理由は風邪が多い。季節が寒さの厳しい冬であることから、これは当然かも知れないが、運動の実践や健康管理を心がけて風邪を予防することが望まれる。

年度別、欠席回数別の人数は表6に示す。欠席回数が1回、2回の人数は各年度とも差がないが、3回になると、61、62年度は欠席した学生は殆どいなくなり、欠席がゼロの学生は増加している。56年度から60年度では3回までは差はないが4回になると、年度によって差がでてくる。また、人数は少ないが各年度に7回以上の欠席がみられる。

学期の前半、後半を一つの期間として、年度によって設定種目はいろいろ変わってきた。その中でバレーボールを5人でやるとか、2、3人のグループでゴルフ、剣道、長距離走、トレーニングと思い思いの種目を設定していること、また、その他の種目でも意欲的に、積極的に取り組んでいることは、自主的な身体活動の実践として評価できる。しかし、自主的に種目を設定することは授業を欠席しない動機づけとしては小さいことが明らかになった。

授業を欠席しない動機づけとして一番大きいのは、61年度、62年度の欠席延べ人数が他の年度に比較して、減少し、有意差も認められることで明らかのように、年度始めに指示した“欠席したら東公園のコースを走る”という具体的な動機づけが最も大きな要因であった。

東公園のコースを走ることは、有酸素運動として、個人の能力に応じて走ってよく、循環機能への効果も期待できるので、心理的な負担はないと考えられる。もちろん、走ることを拒否することはできないので、その意味では懲罰の

側面もある。

欠席して、実際に走った場合でも、楽しく走ること、健康のために良いんだという気持ちを持って走ることを強調し、実践しているので学生の態度も積極的である。

また、走ることを嫌って、授業に出席している学生がいたとしても、それはまた評価されることである。なぜなら、授業の態度は意欲的で、積極的な身体活動をしているし、以前には、安易に妥協していたところを自分の意志で納得し、好ましい行動をするための自制心が育成されたことになるからである。

また、授業に出席するための動機づけとしては不十分であったが、58、59年度に課した冬休みのランニング(注-3回以上欠席した学生が対象で、欠席回数によって距離、または時間を設定)に関しては学生の積極的な取り組みがみられた。レポートによれば大濠公園を15周、30キロいっきに完走し、凄いことを成し遂げた充実感に満足したり、楽しくジョギングしたけれど、高校時代と比較して体力の衰えを感じたので運動の実践を継続したいといったことが報告された。

学生は教官の動機づけ(指導)によって、感動的に運動を実践し、自主的な態度も育成している。放任からは自主性は育ちにくい。

本研究の対象からは外しているが、途中で退学、休学した学生が20名いる。欠席が少なかった学生が突然出席しなくなったり、また、欠席が10回を越える場合もあるが、本心を聞かせることは少なく、進路変更を考えている学生に対する動機づけは難しい。

5 まとめ

本学の体育実技は自主的な活動を尊重した授業を実施しているが、教官の適切で、具体的な動機づけによって、望ましい態度が育成される事が明らかになった。

教官自身が学生の自主性を伸ばすことに意義を認め、動機づけをおこなえば、学生は教官の指導を強制とは受け取らず、不快感も持たずに、意欲的に身体活動を行った。

今後とも、生涯スポーツを実践する基礎づくりに本学の体育が貢献できるよう努力したい。
最後に、本研究に御助言をいただいた久留米工業高等専門学校永松憲治氏に深く感謝します。

6 参 考 文 献

- 1) 前川峯雄「体育学原論」中山書店
1958 P114
- 2) 同上 P116